

## いよいよ最終章。「銀の馬車道劇団」8月に公演



前回の舞台

8月19日(日)、市民会館で「銀の馬車道劇団」による人情喜劇 日本遺産「銀の馬車道・鉱石の道 親より鉱石」が上演されます。同劇団の結成は平成19年。姫路コンベンションサポートが中心となり、趣旨に賛同した松竹株式会社との協力を得て、地域資源「銀の馬車道」を発信することを目的に公演を行ってきました。

明治時代、フランス人技師によって飾磨港と生野鉱山を結び整備された日本初の高速産業道路「銀の馬車道」。1作目、2作目はこの道をテーマに日本人とフランス人の交流を描きましたが、最終章となる今作は「銀の馬車道 鉱石の道」が日本遺産に認定されたことをふまえた物語となっています。

年に一度の夏祭り。跡取り息子が飛び出してしまった郷宿に盗人が現れて……。郷宿の頑固親父を演じる木多見哲夫さ

ん(姫路市)は第1回から全公演に出演。「自分の土地を提供してでも協力しようという地元住民の心意気に打たれる。今回は山師の、意固地な親父役。これまで2作のエピソードも取り入れられて、よりいっそうおもしろいものになると思う」と話します。4才から60才代まで27名が出演し、その約半分が第1回からのメンバーです。大学4年生の奥平大地さん(福崎町)は小学5年生のときに初参加。「ずっとこの劇にかかわってきて、かなり影響を受けた。ここは年代が幅広い、史実や時代背景を知って演じるのがおもしろい」。現在は大学の演劇部に所属しているといいます。

1作目から脚本と演出を手がける松竹チーフプロデューサーの上田浩人さんは「歳を重ねた人たちがどのように生き、子ども世代に何を残していくか。いわゆる『終活』を意識した。フランスの新しい技術と日本古来の山師の技術をモチーフに『対立ではなく共存』ということも描きたい」と話します。

歌手の岸田敏志さん、劇団赤鬼の山口尋美さんをゲストに迎えるほか、養父市から姫路市までのゆるキャラが大集合。姫路コンベンションサポート理事長の玉田恵美さんは「劇中では歌や播州音頭、パパイヤ鈴木さんが振付した福崎町の『カップダンス』なども披露されます。笑いあり、涙ありの人情喜劇をぜひご覧ください」と呼びかけています。

※詳細は6ページをご覧ください。

☎NPO法人 姫路コンベンションサポート ☎079-286-8988

## 姫路市立美術館で「松井紫朗のセンス・オブ・ワンダー」



中庭 ©SHIRO MATSUI 2018

館内の改修工事のため8月1日から来年の2月25日(予定)まで休館する姫路市立美術館をプラットフォームに、8月26日(日)から「松井紫朗のセンス・オブ・ワンダー」が開かれ

ます。

松井さんは奈良県天理市出身の現代美術作家で、現在は京都市立芸術大学教授。1983年の初個展以来、多様な素材、ユーモアと理知を備えた独自の造形で高い評価を受けており、1997年よりテント用の素材や、ナイロン素材のバルーンを使ったサイトスペシフィックな作品(特定の場所に存在するために制作された作品)を次々と発表。人間の知覚や空間認識に揺さぶりをかける作品で知られています。

今回のこの催しは3つのアートプロジェクトで構成されており、7月に行われたプレイベントの《上映会》に続いて、《センス・オブ・ワンダーの庭》《手に取る宇宙 —Message in a Bottle》地上ミッション》が順次展開されていきます。

《センス・オブ……》は、美術館の建物・庭園にバルーン状の造形物4点が出現するものです。このうち美術館正面の2

つの玄関ドアを結ぶ形で設置される造形物は、中が青い膜でおおわれた真っ青なトンネル(通路)状の空間になっており、「人がそこに入ると内と外の概念が揺さぶられ、文字通りのセンス・オブ・ワンダー(不思議の感覚)が味わえるかもしれません」と、担当学芸員の本丸生野さんは話します。

一方の《手に取る宇宙……》は、松井さんがJAXA(宇宙航空研究開発機構)の協力を得て行ったミッション —宇宙飛行士が船外活動中にガラスシリンダーに宇宙の真空を封じ込め、地球に持ち帰る— の成果であるガラスシリンダーを手にとって、その「手に取った宇宙」についての感想などを書き留めてもらい、ウェブ上のアーカイヴにアップしようという試みです。

いずれのプロジェクトも参加型のイベント。参加者はイメージの旅人とも呼ばれる松井さんにも導かれた、知的な冒険を体感できるのでしょうか。

※詳細は7ページをご覧ください。

☎姫路市立美術館 ☎079-222-2288



《手に取る宇宙 イメージ・ドローイング》2013年 ©SHIRO MATSUI 2018